語釈 ： インターネット Twitter 上でみるTrump 米大統領の英語（73）

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後　藤　　寛

C. K. Ogden らが理念とした Basic 世界語彙(Every Man's Words of English)の体系をはじめ、意味の問題を考える上で Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning*『意味の意味』(1923)とともに米国の G. Blocker の *The Meaning of Meaninglessness*『無意味の意味』(1974)の並行読みが手早く有益である旨を本連載でたびたび示唆しているが、文 / text 文は「何が有意味で、何が無意味か」ということになる。

たとえば EP 本なら II, p. 9 の She is brushing her teeth. / Now she is combing her hair, etc. の case（格）の問題が関わっている文をどのように見定めていくか？英語に特徴的で重要な道具名詞の動詞化（instrument noun ⇔ instrument verb)の問題であり、ここではそれぞれ teeth, hair が locative case（位置格）、brush, comb が instrumental case（具格）と見なすことができよう。さらに、たとえば文 He is writing a letter. は **<** he is writing something in a letter with a pen / pencil, etc. [by use of his hand] **>**、文 She is cutting a bit of paper. なら**<** she is making a cut in a bit of paper with the scissors, etc. [by use of her hand] **>**のような分析法をとると深層構造(deep structure)でのこの２つの格の融合(syncretism)を忽然と見ることとなる。ポイントである。

具格が英語に少ないと見るのは表層構造レベルでのことで、深層構造追究で明確になってくる。またもここで C. J. Fillmore の Case Grammar（格文法）への注目となる。これはきわめて重要なポイントだと筆者は考えている。さらに発展的には目下、大学院博士課程（前期・後期）で指導教官の研究室で学んでいる学生の今後の研究業績に期待したい。存在には必ず場がありその場(place / location)と一般には人間の手(hands)を介する道具(instrument)が一緒（一所）になる。動作・行為(act)の統合的な見方である〔本連載(69)、前回(72)参照〕。

また、手(hand)〔cf. 指(thumb, finger)〕といえば EP 本 I・II に次の図絵と文例の提示を見る。

This is a hand.　　I have my first and second fingers across one another.
(EP I, p.10)　　(EP II, p.113)　　**cf**. I am hoping that you will have a happy chance.

左図絵での This is the thumb. / These are the fingers.は末尾に of a hand を補って考える〔本連載(63)参照〕。また右図絵での文の意味は？「私は人差し指 [first finger/forefinger]と中指 [second finger/middle finger]を交差させている」の意味？実はこの図絵のように手（指）のジェスチャーで示せば母語話者なら慣用的な I cross my fingers.「私は幸運を祈る」の意味と理解するはずだろう。しかし情感的な **cf**.の Good luck！の意味での使い方〔Basic なら Happy chance！でよい〕は EP 本では排除され、単なる前者の直示的(deictic / referential)な意味で、後者の情感的(emotive)な意味とは理解しない（理解できない）のが EP 本の本質・特質でこのあたりもポイントである。ここにも Ogden-Richards の semantics（記号論・意味論）を如実に見ることとなる。なお、I have … across one another.のように across の後ろには必ず one another が必要で省略はできない。

英語では手の「指」は親指(thumb)と他の４本の指(fingers)は２分割され Basic 世界語彙 **thumb** は **thick**（太い）とも同系である。C. K. Ogden 監修の GBED：*The General Basic English Dictionary*(1940)は thumb を 'Thickest of the 5 fingers, different in form from the other 4' と定義もしている。裁縫用の「指ぬき」を thimble というが｛thimb (= thumb) + le (= small)｝で同系。**finger**（指）は **five** や fist（握りこぶし）とも同系である〔thumb, finger と各々その多くの同系語(paronym)の例は拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(20)参照〕。

今回は趣向を変え(1), (2)とも Trump 大統領の心中を日本語で先に提示し、次に彼の英語を確認する。(1)は 2019 年 9 月の tweet text。(2)はさかのぼり 2018 年 3 月の tweet で、スペイン語対照でも見る。Trump 大統領の言う good / bad とは何か？彼が否定で 'not good' とした場合、何を 'good' としているのか？本連載(61)で触れた **negative facts（否定の事実）** を改めて想起もしたい〔Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning*, p. 33、および Appendix（付録）末尾 pp. 291-295 参照〕。binary opposition（２項対立）論理とその意味の問題となる〔なお、語 'bad' は英国の作家 G. Orwell の Newspeak（新話法）では 'ungood'(?)が示唆されもした〕。

(1)「わが国の歴史上、私ほどひどく扱われてきた大統領は他にない。民主党議員は憎悪と恐怖で凍りついている。彼らは何もしないのだ。もうこういうことは他の大統領には決してあるまじきことだ。魔女狩りだ！」。

referential（指示的）表示ではなく emotive（情感的）表示であるが、英語は次であった。

There has been no President in the history of our Country who has been treated so badly as I have. The Democrats are frozen with hatred and fear. They get nothing done. This should never be allowed to happen to another President. Witch Hunt ! 🙄 (September 25, 2019)

▲下線部 … so … as I have. の have の使い方には要注目で、前での has been treated の has とつながっている。これは英語での１つの **syntactic pattern（統語法パターン）** であり頻出する。

文中で民主党議員のことを They get nothing done.（彼らは何も成さない）と言っているが、Trump 大統領は the Do Nothing Democrats（何も成さない民主党議員）という言い方をよくしてきた。本来は Do-Nothing と Do と Nothing の間にハイフンを用いるところであるが、膨大な数の Trump 大統領の tweets を見てきたがハイフンを用いる文には出くわしたことがない。hyphen は語形からも分かるがギリシャ系の語で、{hyph (= under) + (h)en (= one)}であることは本連載(51)の(2)で触れておいた。文末に感情顔記号 emoticon も付した。

なお、冒頭での G. Blocker (1974)は「日本の禅仏教(Zen Buddhism)的な無(nothing）の意味」にも注目することは言っておこう〔関連し、ヨガ(Yoga)など後述もする〕。

太線語 treat（扱う・もてなす）の語感を感知しておきたい。「引っ張ること」が原義で、treat は「引き入れること」である。ラテン系で Basic 世界語彙 **train, attraction** など、プラスαBasic 世界語彙 *subtraction*（減法・引き算）など、非世界語彙 trace, track, tractor などが同系。印欧祖語の語根音素形は/DRA/として復元された。元の初頭音素形/t/ではなく/d/からの音[d]をもつゲルマン系の同系語に Basic 世界語彙 **drawer, drain, drink, driving** などがあるし、プラスαBasic 世界語彙 *drift*（漂流物）、非世界語彙 drag, draft（草案・徴兵）、drought（干ばつ）などゲルマン系の語も同系〔同上拙著、第二部、例(7)参照〕。

太線語 witch hunt（魔女狩り）の witch（魔女）は本連載(12)、(14)の(2)ですでに扱い確認となるが、印欧祖語の音素形は/WEID/とされ「見てとることこと」が原義。wizard（男性の魔法使い）とともに Basic 世界語彙 **wise**、プラスαBasic 世界語彙 *witness*（証言）、非世界語彙 wit（機知）などのゲルマン系の語と同系である。

Trump 氏は witch hunt という隠喩 metaphor {meta (= change) + phor (= let go)}を用い言説を展開するが、これは旧約聖書『出エジプト記』(Exodus) 22 章 18 節などに由来するとされ Basic 聖書 BBE :*The Bible in Basic English* では Any woman using unnatural powers or secret acts is to be put to death.と記されている。

関連し日本語に「邪魔」という言葉があるが、実際には強い意味をもつ。ゲルマン系での子音[w]はラテン系では子音[v]（[w] → [v]）となり Basic 世界語彙 **view**、プラスαBasic 世界語彙 *vision*、非世界語彙 video, advise, provide などの語がまたも同系語として一括される〔同上拙著、第二部、例(67)参照〕。

宗教的で不思議な力(power)を発揮する「魔法使い」の witch, wizard とも関わる事項として Ogden-Richards は *The Meaning of Meaning* (Chap. II)で 'THE POWER OF WORDS'という表題の下、word（語）のもつ power（力）に注目している(pp. 24-47)。ここでは次の箇所を見ておこう〔下線、破線は筆者〕。

> The atmosphere of verbalism in which most Indian philosophy developed seems to have been even more dense than that of the scholastics or of the Greek dialecticians. In this respect the Mīmāmsā-Nyāya controversy, the Yoga philosophy … are hardly less remarkable than the doctrine of the Sacred Word AUM and the verbal ecstasies of Sufi mystics, ... (p. 39)

すなわち、インド哲学における空疎な常套語句がスコラ哲学やギリシャ的弁証法論者によるものより密度の濃いものであった流れがあり、いわゆるヨガ哲学などは神聖語 AUM（オーム）の教義やイスラム神秘主義者による言語陶酔にも劣らないものであったと説かれる。言葉の魔術ということで、これを Ogden は文字通り *Word Magic* (1923)で扱ったが宗教的儀式や原始的な医術などでの呪文(spell)の魔力(magic power)は歴史的に絶大なるもであったわけで、このあたりの事情がさらに *The Meaning of Meaning* の Supplement（補遺）で B. Malinowsky が詳述する。彼はここで Ogden-Richards による Triangle of Reference「意味の三角形」での Symbol（象徴）と Referent（指示対象）の間接的結びつきを**「直接的」結びつきの例**とし示しもした。

なお、2 つ目の下線部中の the Sacred Word AUM（神聖語 AUM）の AUM は日本で「オーム真理教」という名辞(name)の下で妙な語釈(lexical interpretation)をし反社会的教義活動を行った宗教団体として知られるが、*The Meaning of Meaning* でこの**聖なる語としての AUM** とは A = Man（人間）、U = Thing（事物）、M = Not（否定）、すなわち「人間は事物に非ず」の意味とされる(p.39)。これは一般言語の場合での機構である「部分(parts)の総和は全体(all)ではない」とする見方とも結びつこう。今日的には本連載前々回(71)で触れた法律文書の意味解釈考となる forensic / legal linguistics（法言語学）も視野に入ってくる。ポイントである。

一方、「部分の総和は全体である」(e.g., 2 + 2 ≠ 5, 2 + 2 = 4)と見るのが科学としての数学言語ということにもなるか？〔EP 本 II では３度提示され p.87, p.144, p.149 参照〕。四則演算(the four operations)に始まる数学言語は空間(space)・順序(order)・大小(size)の３つの関係(SOS)を見る旨を本連載(62)で言った。

数学的等式を解く背景には**移項(transposition)**という考え方がある。等号式を移項すると符号の＋は － に、－ は＋に変わる（変化する）がこの変化の過程を単に機械的とは別にまずは理屈的に根っから見定める必要が

ある。等式変形での移項で符号（＋、－）が変わる理由は両辺に同じ数を①加えても、②引いても、③掛けても、④割っても（ただし、その数は０ではない）その等式は成立するという基本的事実が背景にある。①～④をそれぞれ記号化して示せば A = B → ①' A + C = B + C、②' A － C = B － C、③' AC = BC、④' A/C = B/C (C≠0)となる。たとえば１次方程式 4 + x = 6 の x を求めるには両辺から 4 を引くわけである。4 + x – 4 = 6 – 4 として左辺の 4 が消え（０となり）、x = 2 が決まる。

数学的移項はつり合いをとることで、これは本連載(67)でも言ったが道具としての天秤(scale, balance)に物質を載せ重量(weight)をつり合いで計る見方でもある。数式は記号 (=) の中身と共に意味(meaning)の重さ（重要度）にも何かと示唆を与える〔EP 本ならⅡの p.81、Ⅲの p.165, p.204, p.212 の図絵などを改めて参照〕。

英国の作家 G. Orwell は脅威のファシズム的世界を描いた *Nineteen Eighty-Four*(1949)『1984 年』で 2 + 2 ≠ 4、2 + 2 = 5 を真とする **Newspeak** を提示し War is peace.「戦争は平和なり」（戦争＝平和）という等号関係(is)で結びつけもしたが、この作品は Basic 言語を意識したものという点でもやはり参考となる。なお、英語の 2 + 2 = 4 (Put two and two together and make four.)は情感的(emotive)には「正しく判断せよ」の意味であるが、EP 本ではこの意味は排除される。これも重要なポイントである〔上記、EP II p.87, p.144, p.149 参照〕。

上の(1)での tweet を表層英語文の回転母型（鋳型）[Matrix Screen]に次々と入れその読み・聴（聞）き、すなわち reading / hearing (listening)での解かり方（理解法）として次に見てみたい。一方、これは外国語教授法などでの transcription（書写・書き起こし）では基本的に読み上げでの意味的区切り目・息つぎとも関わることは言うまでもない。今回も表層上で空（ϕ）となり消えている項への特別な注目にも意義がある。仮にスロット(slot)をすべて埋め尽くすとすると、どういう見方となるか？ϕ 項は **There's no there there.**か？〔関連しては本連載(60), (66), (68)など参照〕。たとえば電話中に相手が沈黙していれば“もしもし”の意味で Are you there ?ともよく言うが、感嘆詞的に EP 本 II で There！ It is open now. の例を提示はする(EP II, p.221)。

次に上の tweet 文例を Basic での仮称 ASMO /ǽsmou/：Automatic Sorting Machine for Output English（表層英文自動分割機）スクリーン上で見てみる。静止文字が仮現運動(apparent movement)で動く今日的な **Electric Sign Board / Electronic Bulletin Board / Digital Signs（電子掲示板）**風に可視化し追っていくと同時に目には見えない不可視の深層パターン認知(deep pattern recognition)をしていくわけである。ASMO の Basic 別名 ASSR /ǽsɚ/：Automatic Statement Structure Reader も仮称とすることは本連載(54), (56)で言った。将来的には「外国語としての英語」の Quick Reading : QR にも益するはずのこの人工モデル機器の開発だろう。

STATEMENT					
		THEME : NP	RHEME : VP		
STR	C/C	N_1	COP／V	N_2／N_3／A	ADV
1	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ	There
2	ϕ	ϕ	has been	no President	in the history of our Country/
3	who	ϕ	has been treated	ϕ	so badly
4	as	I	have. //	ϕ	ϕ
1	ϕ	The Democrats /	are frozen	ϕ	with hatred and fear.
1	ϕ	They /	get	nothing done. //	ϕ
1	ϕ	This	should never be allowed	ϕ	ϕ
2	to	ϕ	happen /	ϕ	to another President. //
1	ϕ	ϕ	ϕ	Witch Hunt ! //	ϕ

（備考）単一斜線（／）は各々の文での意味的２分割線、各項は（3± α）語として実現する。

〔以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01- 05)より ― ２言語対照〕

(2)「日本の安倍首相と電話会談をしたが彼は北朝鮮問題には情熱的だ、同時に日米のより良好な貿易に関し話し合っている、目下、米国は一千億ドルの貿易赤字でフェアーでなく維持不可能だ、今後解決していく！」

Trump 大統領は日本との貿易赤字をこの頃からかなり問題としていたが、これをメモ書き式での tweet とした。カジュアルなメモ書き式英語に習熟したい。それを次で見てみる。文末に emoticon も付しておく。

Spoke to Prime Minister Abe of Japan, who is very enthusiastic about talks with North Korea. Also discussing opening up Japan to much better trade with the U.S. Currently have a massive $100 Billion Trade Deficit. Not fair or sustainable. It will all work out ! 🤔 (March 10, 2018)

cf. Hablé con el Primer Ministro Abe de Japón, a quien le emocionan las charlas con Corea del Norte. También hablamos de la apertura de Japón a un mucho major comercio con los EEUU.

Actualmente tenemos un enorme déficit de $100K millones.　No es justo ni sostenible.　¡Todo se solucionará！（10 de marzo, 2018）

▲英文での太線語 enthusiastic（情熱的な）は本連載(63)の(1)ですでに扱ったことになる。語形からも分かるがギリシャ系の語で、語根 thus が「神(god)」の意味だと理解することは重要である。enthusiastic は{en (= in) + thus (= *god*) + iastic}で「神が乗り移った」の意味である。theology（神学）などは同系であるが、Basic 世界語彙によりどころを求めれば 850 語本体では **theory**、プラスαBasic 世界語彙では *theater*（劇場）も同系である〔本連載(29)でも触れた〕。非世界語彙では theorem（定理）なども根元ではつながっている同系語である。「見ること、透視すること」という語感をもつ。英語の人名にも神がかったものがいくつかあり、Dorothy, Theodore, Timothy などがこの系統とされる。共通な[θ] 音が響くところにその証を垣間見る。ただし、PIE（印欧祖語）の音体系には実は[θ]音はなかった。これに近い[dh]音だったことを文献は教える。

下線の have は we have であるが、メモ書き式の略式英語で we はここでは省略されている。

下線の work out はスペイン語翻訳では se solucionará (= will be resolved / solved)とされ、分析的な analytic language の英語に比べ総合的な synthetic language のスペイン語のほうが日本人には分かりやすい例である。

cf.のスペイン語 ministro, emocionan (< emocionar), charlas, mucho, comercio, enorme, déficit, millones, justo, sostenible, solucionará (< solucionar)に対応する英語はもう次々と呼び覚まされるであろう。それぞれ minister, emote, chats, **much**, commerce, enormous, deficit, millions, just, sustainable, solve に対応し、同系語である（太字体はBasic 世界語彙、下線はBasic 世界語彙の範疇語）。スペイン語は音と文字の関係の **phonics**（フォニックス）がきわめて簡素で断然、英語より平易である。

なお、上での「情熱的である」の英語 be enthusiastic とスペイン語の emocionar(se)が対応することになるが、両者は対応語であり同系語ではない。英語の enthusiastic と同系のスペイン語は entusiasmado(-a)である。また、上で英語の currently と対応する語がスペイン語では actualmente となる。スペイン語の actualmente（目下）の actual（mente は副詞語尾）は英語の actual（実際の）に対応するが、スペイン語の actual は「現在の」の意味で用いるのが一般的である。スペイン語 actualmente は興味深い語の 1 つである。

ところで、英語の be enthusiastic about（～に熱心である）のような例で enthusiastic は空間詞 about としか共起しないか？実は他に for, in, at などとも共起する。こういう例は英語に多くあり、意味的相違・ニュアンスの問題を含め日本人には悩みのタネとなっている。使い分けに迷うなら実は over を用いればよいことが多い。意味的に広くカバーし抵抗感はなくなる。over は「超えた上のこと」がもちろん原義であるが、何でも「関すること、まつわること」であれば英語で広く使える。その感覚をつかんでおくとよい。

英語での空間表示(spatial representation)は実に煩雑であるが、**人工言語 Esperanto** はこういう英語など自然言語における煩雑な点を簡略化し見事に考案された。Esperanto 語は英語の 50 倍やさしいというのが学会の通説でもある旨を本連載(45)で言ったが Esperanto 語の空間詞は全部で 33 種で、そのうちの 'je' が意味の決まっていない関係性を示すものとして設定された。この万能の je を用いれば何でもスラスラ言えてしまう。そのように Esperanto 語はできている。感情表示も豊かな人工言語 AL：Artificial Language である。

筆者が Basic 英語と並行し Esperanto 語に取り組んでいたのが学生時代で、この人工言語の方法が筆者の便宜的な呼称「半人工世界言語(semi-artificial world language：SAWL [sɔːl])」たる Basic 英語に関しても当時大いに思索の基となった。書斎に Esperanto 語の書、その音声の録音テープが相当数あるが英語・Basic 英語・他西洋言語を考える上で大いにヒントとなった。Esperanto 語で筆者が範とした最初の書が『エスペラント四週間』（大島義夫著、大学書林、1961）であった。まったくの 0 から本気で取り組み確かに四週間で手早く全体系を一通り把握し、かなりなレベルまで一気に身についた。旧・新約 Esperanto 語聖書(*La Sankta Biblio*)も Basic 聖書との対照で紐解いていた。今日、他言語の多くのこの四週間シリーズ物があるが最も最初の刊は『スペイン語四週間』（笠井鎮夫著、1933）であったようである。スペイン語は英語の 20 倍程やさしいだろうか？発話での呼吸法も実に楽である。『英語四週間』もあるが『ベーシック英語四週間』が刊行されてもよかろうか？

Basic も sentence レベルで何カ月間、何年間も見ていても時間を費やす割には意外に身につかず、臨機応変に使える力には結びつかない。散発的に sentence 単位で見るのではなく、より息の長い text 単位でじっくり学び思索を重ねる必要がある。discourse analysis（談話分析）の問題と関わる。EP 本 I-III での Basic 実践は「(850＋α)語の **Basic 世界語彙**が**心の中であふれ出る状態**」でもなお「十分条件」足りえないだろう。「必要十分条件（数学・論理学上の A⇔B）」が満たされて実践できうるものだろう旨は本連載でたびたび触れた。また、科学としての Basic 言語はその理論面(ogdenology)からの徹底的追究をもってして実践面とも結びつくはずだろう。本連載で見ている同系語(paronym)への注目は必然的に語感を培い、根っから Basic 力を磨く手早い手法となる。「GD 法で英語を学ぶ法」(the Step-by-Step and English-through-English (SSEE) Way of Learning English)もその G (Grade)とともに D の English の中身も関わるが、本会の「**EP 本で英語を英語で」の Basic 実践**は**総括的**には **III** を各頁別に**言語と人間と社会の問題**として考える「**講読実践**」となろう旨も前回言った。